

令和2年度「不登校に関する研修会」(第4回) 講義記録

1 日 時 令和2年11月6日(金) 10:15~12:00

2 場 所 洲本市文化体育館

3 講 師 県立尼崎総合医療センター 石原 剛広 小児科医長

4 テーマ 発達障害と不登校 ～発達特性の理解と関わりについて～

5 内 容

(1) はじめに

- ・ 普段発達障害という言葉は使わず、発達特性という言葉を使う。
- ・ 臨床現場で出会うのは困っているグレーゾーンの子が多く、そのような子は医療の診断を受けていないことが多い。
- ・ 発達特性がある子は困っており、その生きづらさをどうするのが大事である。

(2) 発達特性とは

ア 発達特性のある有名人

- ・ ベートーヴェン、アインシュタインなどの有名人も発達の特性もあるが大きな仕事を成し遂げている。

イ 主な発達特性

- ・ 注意欠陥・多動性障害 (ADHD)
年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、衝動性、多動性を特徴とする行動の障害である。怒られて育つので自尊心が低い子、情緒が安定しない子が多い。
- ・ 学習障害 (LD)
学習障害は知的障害とは違う。知的障害はないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力の障害である。
- ・ 自閉スペクトラム症 (ASD)
こだわり、言葉の障害、対人関係の問題を特徴とする認知、行動の障害である。

ウ 発達特性のスペクトラム(PARS の評価項目)

- ・ 発達の特性には6つある。スペクトラムは連続しているという意味である。
- ①過敏性(ASD)・・・聴覚過敏 味覚過敏 嗅覚過敏 触覚過敏などがある。
- ②対人関係(ASD)・・・周囲との関係についてちょっとズレている。生きづらさがある。心の理論の理解の遅れがある。視覚的に物事を考える。
- ③ことばの遅れ(ASD)・・・文章が書けない、読めないものがおおく、気持ちや経験を言葉で整理することが苦手で、作文が書けない。
- ④衝動性・多動(ADHD)・・・注意欠陥は心の多動であり、成長しても残ることが多い。多動性障害は体の多動であり、成長とともに落ち着く。
- ⑤常同性(ASD)・・・繰り返しを好む。目標があればストイックに望む。確固たる自分の規則がある。
- ⑥こだわり(ASD)・・・思い込みが強い。狭く深い自分の世界を持つ。

エ 発達特性の人とは

- ・ ASD と ADHD 両方合わせ持っている人は多い。
- ・ 心の理論の遅れやマイルール、とらわれがあり周囲とちょっとずれており、登場人物を自分に置き換えることができず、状況判断ができない。
- ・ 相手の立場に立ってマネができないという障害であるが、大人になるできるようになる。ゆっくと理解していく。

- ・発達特性がある子は、周りの子との関係が上手くいかない。小3～4年ぐらいから定型発達の児童とは差ができるようになり、行き渋りや体の症状が出てくる。発達特性がある子はこだわりがあったり、常同性が上手くいかないと癩癩を起したりする。

オ HSC/HSP (Highly sensitive child/person)は発達障害なのか

- ・女性の方が多い、不登校になる子も多い。臨床像としては発達特性の過敏性・不器用、対人関係が際だったのがHSCである。HSCは発達特性の1つである。

カ どこにでもいる発達特性の人

- ・最新の医療統計では医療相談を受けたことがある人は10%程度とされているが、人口比30%ぐらいはなんらかの発達特性はあるのではないか。
- ・周囲の責任だけではなく周囲とのズレがブーメランで返ってきている場合もある。
- ・人と違っていい、ダイバーシティ、多様性、インクルーシブという考え方が大事であり、環境を選んであげることで、その子がその子でいられる。
- ・将来の予防、見立てができるので発達特性があると分かった方がいい。

キ 中学校での訪問授業

- ・「発達特性のある子」と「発達特性のある子が周りにいる子」に向けて授業を行った。
- ・児童生徒へのエール
「人と違うのは当たり前なので、「変」と思われてもいいんだよ」
「傷つくことはたくさんあるかもだけど、「人は人、自分は自分」を忘れずに」
「だれでもみんな不得意があるので、できないことがあってもいいよ」

ク 発達特性の見分け方

- ・観察が90%、問診が10%、心理検査は参考程度である。観察が一番大切。観察のポイントとしては顔つき、姿勢、歩き方、話し方、容姿、興味、行動等がある。

ケ ギフテッド (gifted)

- ・天才。「(神から)授けられた」という意の生まれつき高い能力をもつ人たちで、性質としては内的な学びの素質、学習能力をすでにもっている。優等生とギフテッドの違いのポイントは、問題行動があるかないかである。
- ・発達障害とギフテッドの両方の問題を持つ人は、少数である。

2E (=Twice-exceptional) : 2重の例外

発達凸凹(10人に1人)×ギフテッド(50人に1人) = 2E(500人に1人)

(3) 二次障害という課題

ア 環境因子の大切さ

- ・個人因子 × 環境因子 → 二次的な問題(二次障害)
- ・発達特性があっても環境が整っていたら二次障害は起こらない。だから家庭や教育の関わりなどの環境因子は大事になる。
- ・病院で診察されるのがゴールではない。薬を飲んだらどうにかなるわけでもない。
- ・個人因子と環境因子の見立てができていないグレーゾーンの子たちが多いので、不登校児童生徒は増えている。

イ 二次障害

- ①身体症状と不登校：起立性調節障害と診断され、ストレスという原因に対するアプローチがないまま症状が改善しないケースが多い。起立性調節障害は血圧の調整の不具合。起き上がっても血圧が上がらないので、いろいろな身体症状が出る。
- ②愛着障害：教育者のまなごしの不在。発達性トラウマ障害という概念。
- ③PTSD：体の変化、心の変化、行動の変化が起こる。
- ④解離性障害：トラウマを受け止められず、認知・記憶、感覚、運動が機能しない。まじめながんばり屋さんになりやすい。

(4) 理解ある関わりについて

ア かかわりの3原則

- ・小学校4年くらいまでは【ほめる、あきらめる、ルールを決める】の3つ、思春期以降は、【みとめる、あきらめる、失敗させる】の3つである。

イ かんしゃくと強化

- ・ASDの傾向が強い人は、かんしゃくが強い。
- ・自分の思い通りにならない（予定外・想定外の状況）→かんしゃく（巻きこみ）→機嫌がよくなる。児童生徒の要求通りのことをする（巻きこまれ）とその行動は強化され誤学習される。
- ・かんしゃくには計画的無視を。自分の思い通りにならない（予定外・想定外の状況）→かんしゃく（巻きこみ）→自力で落ち着く。計画的無視＝ほめるために待つ。
- ・かんしゃくを注意するのではなく がまんできたことをほめる
- ・難しいケースは、動画もゲームも無制限で親が子どもをコントロールできていない。

ウ 発達特性5箇条

- 一. 障害ではなく特性とする。
- 一. 人とは少々違うことを受け入れる。ありのままですべてをやっていくためにどうしたらよいかを考える。
- 一. 特性のある仲間を見つける。
- 一. 自分の居場所を見つける。
- 一. 特性とともに生きる。